

## 加古川のオフィス

正会員 坂本 昭君

新興住宅地に建てられたミニマムデザインのレジデンスオフィス。

道路に面した導入部の敷地を芝生広場として、地域に開放し、その中に真っ白のコンクリートスラブのステージを据えたアプローチは、厳密なプロポーションの操作によってオフィスの白い壁や、それと直行するコンクリート化粧打ち放しの袖壁と呼応し、空間を共鳴させる特徴のあるランドスケープとなっている。

その広がりのある開放的なアプローチから、壁とキューブに囲まれたスリット状のエントランス導入部を通過して室内に導かれると、直接二層吹き抜けの共有スペースが待ち受けている。無垢の大きなテーブルがオフィススペース。その正面の打ち放し壁のスリットの奥、両側に階段があり、オープンな二階スペースに連続する。開放から閉鎖さらにまた開放から親密な空間へと、空間の連続の中に緊張と弛緩のリズムが仕込まれており、白壁とコンクリートの素材のみが交互に立ち現われてその緩急を意識させる。

西側の小部屋は応接室、東側の小部屋は事務スペース、さらにエントランス上部の控えの間につながり、そこからは振り返り際に吹き抜けを望む屋上スペースへの階段へ連続する。延べ面積わずか117m<sup>2</sup>のこの建築は、この回遊性によって拡がりを獲得し、静まる緊張感の中に動きのある空間構成となっている。

周辺の住宅への視線を考慮して開口を限定しながらも、すべての寸法とその比例が厳密にスタディされ、トップライトからの効果的な光によって、むしろ開放感さえ感じられる静謐な空間が実現している。壁の段差部やトップライトに隠された効果的な間接照明を主体とした照明計画も徹底しており、床暖房と暖炉、吹き抜けに面した繊細なルーバーの吹き出しに限った空調などすべての設備も操作が加えられ、並べ替えられて、空間の奥行きを強調している。

効果的に植栽された落葉樹の枝の影が時間によって変化し、光と影が空間を色づかせる。材料を限り、各種金物の開発やエッジの精度、コンクリート型枠のジョイント目地までに及ぶディテールの追い込みによって、一本の線を徹底して消し切り、素材の特徴を際立たせ、緊張感を高めながら、しかし無機質な疎外感ではなく、あちこちに設計者と作り手の細やかな意図が見え隠れし、むしろ暖かささえ感じられるモダンデザインの一つの極みを見せる秀作である。

事務テーブルにも食卓にもなる大テーブルなど、住宅スケールの新しいオフィスの可能性を示唆するものであり、なによりその空間の質の高さ、完成度は際立っている。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。